論説

呂赫若作品における「家」の変容について

ー「家」から出発しない男たちー

羅　玠旻

はじめに

本稿は、呂赫若が日本留学を終え台湾に戻った後、『台湾文学』に発表した「財子壽」、「風水」、「合家平安」、「柘榴」の四作品を発表順に取り上げ、論じたものである。台湾の様々な風俗習慣を作品ごとに織り込み、「家」をモチーフとした独特な作品世界を展開しようとしていることが『台湾文学』に発表した一連の作品の大きな特徴となっている。

こうした特徴は、呂のこの時期の作品を論じる際、無視できないテーマであり、これまでも多くの先行研究において「家」というモチーフを中心に綿密な検証がなされてきたが、これらの作品については、従来散発的に論じられることが多く、中でも比較的長篇の幾つかの小説に論が集中している傾向が見られる。なお、これら先行研究の多くは、「家」の問題を論じるに際し、時代背景としての植民地支配をクローズアップし、そこに呂の批判的意図を見いだそうとする論説がほとんどであると思われる。

確かに、こうした「家」の問題を論じる際、家に関わる時代背景、すなわち伝統社会から日本植民地時代への変化の事実は無視できないが、家の問題の背後に時代の変動に伴う家族の形態、及び家族の関係性の変化が暗示されていることも同時に検証する必要があろう。例えば、初期からの作品と比較すると、この時期の作品においては、作品中の女性に関する描写が一段と少なくなり、専ら男性の視点から伝統的な家父長制下における家の内外の情況を描く作品が殆どである。従って、まず、「家」の外部においては、植民地社会における縦の関係性を中心に、とりわけ被植民側の階級問題に着目し、男性中心社会における地主、知識人、小作などといった、重層的に構成された権力関係から生じた矛盾と問題を検討する必要がある。そして、「家」の内部においては、家という場を介して主人公と家族（他者）との様々な家族関係

の中で、特に父対子（兄対弟）の関係性が強く意識されるかのように作品中に織り込まれている点には注意が必要であろう。子の父（弟の兄）への執着とともに、それと背中合わせの反発と闘争（もしくはその逆のパータン）というアンビバレントな関係性がこれらの作品においては、大きな共通点として挙げられる。

本稿では、先行研究を踏まえつつ「家」、「家族」というモチーフにスポットを当て、各作品の男性主人公、とりわけ養子という身分を同時に有する長男という人物像に焦点を当てながら、作品中に描かれた男性像の持つ意味を検討し、さらに呂が執拗に「家」をテーマにした作品を創作した意味についても考えてみたい。

１「財子壽」と「風水」

(1)

「財子壽」は 1942 年 3 月『台湾文学』2 巻 2 号に発表された作品である。主人公である周海文は周家の長男であり、父の九舎が亡くなった後、新しい当主となり、一家を継ぐこととなった。しかし、周海文は自らの利益を図る男であり、兄弟たちとは価値観が異なることから、兄弟間の争いが絶えることが無い。そのため、父が死去するやいなや財産分与をおこない分家するようになる、という台湾の伝統的な大家族の内容を軸に、作品世界が展開していく。その一方、「風水」は、1942 年 10 月『台湾文学』2 巻 4 号に発表された作品で、作品内容はタイトル通り小説の主人公である周長乾、長坤兄弟が、両親の風水（洗骨）[1]に対する意見の不一致で争いを始め、最後には家を崩壊させるストーリーである。「財子壽」の兄弟設定とはやや違うが、祖先崇拝を重んじ家の伝統を大切にするような好人物として描かれる長男の周長乾に対し、家の伝統より自らの利益を最優先に考えているのが弟の長坤である。

利己的な男である周海文、兄弟思いの周長乾の二人は、キャラクター上の描写において異なるところが見られるものの、どちらも先代から伝わってきた家の伝統を維持しようとする点では一致している。それに対し、次男である弟の海山と長坤の二人に共通しているのは、新しい価値観を身に付け、古い家を後にして新時代の風を追いかける男性として描かれていることである。

先行研究の多くは、これら二作を同時に取り上げて比較し、「家」とその外部－社会との関連性から、前近代社会を代表する周両家を通じ「台湾における封建家庭の崩壊」や「農業社会における道徳の危機と解体」などの実態が暴かれるといった解釈で一致している傾向が見られる[2]。しかしながら、その一方でこれらの家の内部、即ち固有の家族の枠組みにおける家族関係の変化、ひいては周海文と周長乾それぞれの兄弟たちの価値観の対立も、家を変容させる要因として考量しなければならないのである。

(2)

「財子寿」と「風水」における周両家の兄弟たちの権力闘争のもとを突き止めれば、家の相続を巡る争いに帰着する。鈴木清一郎によれば、台湾における「家」の相続に関する旧慣には、宗祧[3]及び財産の承継がある。宗祧承継とは祖先の祭祀に関する相続であり、男尊女卑の文化に偏る伝統的な台湾家庭においては、祖先の祭祀に関する宗祧継承は、直系嫡長の男子が当たるとされている。また、財産承継に関しても、基本的に女性は財産を相続する資格がないと見なされ、財産相続と言えば、やはり男性家族を中心に行われるのである[4]。さらに、家族中心主義を重んじる台湾の家庭において、何よりも重視されるのは家庭内における秩序が維持されることである。家庭の秩序を維持する基盤として、最も重要視されるのは家に関する礼儀作法である。長幼の序がある家においては、礼は家の大法であり家を率いる尊長のみならず先亡の尊長に対しても礼を致すべきだとされ、中でも特に先祖の尊長に対する礼が厳重に規定されている。こうした原因もあり、台湾では財産より宗祧継承の方がより大切に重視されていたと言われるが[5]、このような伝統的な家の形態・慣習は、時代の動きに伴い変化し始める。前近代の台湾社会は農耕を中心とする大家族制度であるため、家庭内における支配者は血筋や身分で決められており、人間関係による支配であるがゆえに支配に恣意性が入ることが許されている。言い換えれば、法的な支配という観念が薄い前近代の台湾家庭においては、家父長制の下で無条件に優遇されてきた長男は、家において恣意的な支配権を振るうことが許されることを意味する。しかしながら、植民地支配が始まると同時に法的概念[6]が台湾に導入され、家庭における長男

の特権も変わり始める。こうして、時代の変動と共に伝統的な家の形態が変化していくに連れ、従来にはない家を巡る様々な問題、とりわけ宗祧・財産承継に纏わる兄弟の葛藤などが出現する。「財子壽」及び「風水」の二作には、そうした家の変容が描き込まれている。

(3)

植民地支配が始まることは、「近代」的な制度が前近代の家庭に持ち込まれることをも意味する。つまり、教育や法律などといったものが家に持ち込まれることになるのである。しかし、こうした近代的な制度は、古く伝統的な家で育った長男たちにとって、決して全て喜んで受け入れられるものではない。なぜならば、これら「近代」の産物は、時にかえって彼らの家庭における地位を脅かすものとなるからである。結局、「近代」を目の前にし「財子寿」と「風水」の長男たちが決心したのは、「近代」を窺いながらも、それを「家」に入れることを拒むことである。必死に避けた挙げ句に「家」に立てこもることとなり、決して「家」から出ようとしないのである。以上のように、周両家の長男たちが体現した行動に彼らが旨とする人生テーマと相反するものが多く見られるのも、このようなアンビバレンツな心理によるものである。

(3)-1

例えば、先代の恩恵を受け継いで若くして周家の当主となった周海文にとって、彼の人生を貫く哲学は、小説のタイトル「財子寿」に表されているように、財産及び子孫を増やし、長生きすることである。しかしながら、その人生哲学は決して家族贔屓によるものではなく、彼は「非常に個人的であり、物質的で自分の利益のためには如何なる手段をも躊躇しな」い男である。彼の金銭への執着は先妻が亡くなった時に妻の死より保険金を喜び、弟の海山が結婚する時に「吝嗇」と言うしかない結婚式しか執り行わなかったほどのものである。分家した後、持ち分の財産を資本金にし「華々しく資産を投じて、カフエー、撞球場、タクシー屋」を経営し積極的に事業を営む弟たちとは逆に、周海文は事業の必要を認めず「親譲りの財産を倹約して守ればい」いと消極的な考えを持ち、事業などを行う必要はないとする。そして、兄弟

たちが分家を機に古い建築より、新鮮な洋館に憧れ、洋館を建て引っ越すのに対し、周海文はひたすら先代から残された広大な屋敷「福壽堂」を固守することしかしない。それが故に彼は親戚との社交的な付き合いも一切せず、ひいては「親の時代から傳つて来た保正の公職も機會があれば辭しようと努め」るような態度を見せる。大いに事業を拡大しようとする弟たちの積極的な姿勢とは逆に、財・子・寿が示すような人生哲学を自らの座右の銘とする周海文は、物質的に極端な欲望を一方に持ちながらも、終始消極的な行動しか見せない。「財子寿」を人生の目標にすることとは裏腹に、周海文が新しい事業や生活スタイルのような「近代」を避けようとしているのは、「近代」が彼にいかなる危険をもたらすかを意識の深層で察知していたからである。

先述した通り、家族中心主義を重んじる前近代の台湾家庭においては、何よりも重視されるのは家庭内における秩序の維持であり、一家の家長が有する絶対的な権力は家族成員から侵されることは許されないのである。要するに、父の死後やっと一家の実権を手に入れ「家族に君臨して家事一切自分の思ふままに」差配したかった周海文にとって、華々しくお金を使い「新時代の空氣を吸ひ込ん」で、「洋服を着込んで都會の遊里に足をふみ入れ田舎を跳び出さ」うとする弟の海山は、まさに一家の秩序を乱す目の敵のような存在である。だからこそ、事毎に反抗し常に家長である彼の権力を侵蝕しようとする海山から分家を提案された際、周海文は実は弟たちの誰よりもそれを強く希望したのである。分家することは、自らの財産を弟たちに分配することを防ぐだけでなく、それが一家の秩序を乱す禍根を絶つ方法でもあり、また家における彼の権威を維持する手段でもあるからである。

そのほかにも、下女の秋香と素珠のエピソードには、彼のこうした矛盾した精神構造が描き出されていると思われる。作品中では、下女でありながらも、素珠の身分の説明は「戸籍上は同居人」とされているが、秋香にしろ素珠にしろ、彼女たちは小さい頃に先妻と一緒に周家にやってきた「査媒嫺」[7]である。査媒嫺は、社会的に人格的な価値を認められないだけではなく、家においても一家の家長は査媒嫺に対し自由に婚嫁させることができ、ひいては物扱いし賣買するといったような絶対的な権限を有している。こうして、周海文は家長の地位を利用し、自らの欲望を満たすために下女の秋香や素珠

に妊娠させたにも拘わらず、一旦彼女たちに飽きてくると、躊躇なくそれぞれの嫁ぎ先を探し、彼女たちを家から追い出そうとする。ところが、こうした査媒嫺の制度は前近代の台湾社会では存在することが許されながらも、植民地支配下で「公の秩序善良の風俗に反す」るものとされ、戸籍には戸口上の届出が受理されないようになる。保正の公職にある周海文は、誰よりも「戸籍上は同居人」と記されることの意味を知っているはずである。近代社会の法的な規範のもとで戸主となった周海文は、民法による一定の規範を守らなければならず、家及び家族に対しても、権利だけを主張するのではなく、権利の主張と共に相対的な義務をも負わなければならないのである[8]。しかしながら、かつて個人的、かつ恣意的に支配できる世界に安住してきた当主から、権利と義務を同時に課せられる戸主へと変わった周海文の意識の深層では、前近代的な家庭における絶対的な権力へ回帰しようとする欲求と、法的な規範に規制されることとの不協和が、彼の様々な言動にまで影響を与えたと考えられる。自らの権力を脅しかねない近代への懐疑と不安を解消されないままに、「近代」に関わるものからできるだけ遠ざかり、保正の公職を辞するような消極的な態度を示すのもこうした理由によるものかもしれない。

(3)-2

「風水」に描かれるのは父の洗骨に起因して、宗祧継承問題を巡り争う周長乾・長坤兄弟一家の物語である。しかしながら、「風水」の中には、長幼の序が大いに重んじられる伝統的な台湾家庭、そして一家を率いて家庭の秩序を維持する長男の姿は見られない。

長男であるにも拘わらず、親孝行の証として父の洗骨を行おうとする周長乾に対し、父の風水が一家の幸福を庇護するのみならず、一族を繁栄させることを理由に父の洗骨を断固拒むのは弟の周長坤である。さらに、風水への信仰が深い弟に対し、周長乾は「單純に考へて洗骨しようとし」た自分ばかりを責め、弟に遠慮した挙げ句に、長年父親の夢に悩まされてきたにも拘わらず、最大の親孝行と考えていた父の洗骨までも中断させてしまう。そのほかにも、洗骨に対する意見が対立しながら、家庭の円満をはかるため幾たびも弟の無理な要求を飲んできた周長乾は、父の死をきっかけに弟から公廳の

什器の分配を要求された際、まるで「祖先の位牌を分配さ」れ、祖先を家から追い出されるようだと腹を立て、一旦弟からの要求を断ったものの、結局やはり弟に譲歩し、弟の分け前を買い上げることによって解決するようになった。

こうして、一途に風水を信じ込む弟に比べ、「意識的に富貴になるやうに風水を決める」ことを信じない、というように、伝統的な習慣に対し比較的理性的な態度を見せる周長乾ではあるが、弟の行為に対しては却って一貫して「非理性」的な言動しか見せない。さらに、小説の最後で周長乾は、無理に早めた母親の洗骨についても、弟が功利至上主義に走った原因が、弟一個人の問題によるものだけではなく、やはり道徳、礼教の退廃した「眼前の私利の欲望のために敢へて祖先を犠牲にする今時の人々の浅間し」さが満ちる世の中にも責任があると考える。

周長乾の心情の表れとして読まれるこの箇所は、先行研究において「風水」の中心テーマが凝集して表象される箇所であると指摘されてきた。論説の大半は、この箇所を植民地支配者により台湾の伝統的な家族共同体が破壊されてしまうことが隠喩されている部分と捉え、呂の植民地支配への批判が最も直接的に読み取れる部分としてきた[9]。

しかしながら、この箇所は、呂が前近代社会を懐かしみながら植民地支配を批判していると解釈する以外にも、植民地支配下において従来の家父長制の家庭形態が変容を余儀なくされる現実、すなわち周氏兄弟の間の微妙な力関係の変化が具現されるメタファーとして読むこともできる。その力関係の変化こそが、周長乾は弟の行為に対する「非理性」的な言動にも繋がっている。つまり、伝統的な価値観の衰退への嘆きの背後には、近代社会を躊躇なく受け入れる弟を意識しつつも、うまく時代の流れに追いつけず、次第に社会から取り残されていく周長乾老人の寂しい姿が同時に映し出されている。言い換えれば、近代に対する受け入れ方の違いが、周兄弟の力関係を変化させる鍵となり、兄弟両家が違う運命を辿っていく分岐点となることがここの描写に凝縮されている。

そもそも、周兄弟の人生の明暗を最もはっきりと分けるのは、「近代」に直に繋がる教育の受け入れ方である。「乞食坤仔」と呼ばれながらも「近代」

がもたらした教育機会を十分に利用し、子供たちに教育を受けさせ、確実に一家を繁栄させる道へ導くことに成功したのは、紛れもなく次男の周長坤である。その一方、周長乾は自分の息子たちに「自由のまゝに育てあげ、學校も本人の望むまゝに任せてゐ」たがゆえに、いつになっても「親の脛を囓つてゐ」る状態に導いてしまうのである。一家の家長であるにもかかわらず、時勢の変化に適応できず、斜陽族の如く一家を没落させかけたのは、まさに周長乾自身である。つまり、両親の風水を巡って弟に洗骨を行う主導権まで奪われ、また一方で自らの怠慢により先代が築き上げた身代を失っていく情けなさ。もはや家における長男としての地位が崩壊寸前の周長乾に出来るのは、過去の栄光に縋り、「八の字に髭をのばして辮髪をした祖父の命ずるがまゝに多数の家族が禮節を重んじ」た祖父の時代を懐かしく思うことしかない。さらに、必要以上に弟に譲歩しながらも、やはり弟の成功を功利至上主義に走ったと批判し、その問題の所在を世間の道徳、禮教の退廃へと普遍化させることにより、自らの窮境をごまかすのである。このように、「財子壽」と「風水」には、周両家が抱えている問題は多少違うとはいえ、時代の変化の中、積極的に近代を抱擁する次男と、近代に直面しつつも前へ進もうとしない長男との対立が描かれているといえる。

２「合家平安」

(1)

「合家平安」は 1943 年 4 月『台湾文学』3 巻 2 号に発表された作品である。話の軸となるのは、主人公である范慶星が、阿片吸引の因習のため、先代から多くの財産を相続しながらも、最後には一家崩壊に陥るという内容である。范家の当主范慶星には、早く亡くなった先妻との間に子供ができなかったため、養子である有福を長男として迎えていたが、後妻との間に実の息子二人が誕生した後、有福は范慶星の先妻の実家に引き取られることとなる。息子三人を持つ范慶星は長年阿片を吸引し家産を使い果たしてしまったため、最後には実の息子たちからも見放されてしまう。自由に家を離れ南洋へ去っていく弟たちとは逆に、幼時に見捨てられたとは言え長男である有福は、弟達の代わりに長男としての責任を果たすよう、父から無理に同居を要求され

始める。以上が「合家平安」の粗筋である。

「合家平安」を論じた先行研究の中では、この作品のテーマを「反封建」、「帝国主義への批判」とし范慶星の阿片吸引に焦点を当てて論じることが多い。例えば林瑞明氏は、呂が「合家平安」を通じて描こうとしたのは、范慶星の阿片吸引の問題を取り上げることで、阿片吸引の陋習が吸引者を自己堕落の道へ導くのみならず、後代子孫をも苦しませることとなる、と説明する[10]。柳書琴氏も有福を家父長制の犠牲者とし、范一家を崩壊させる原因は、同様に范慶星の阿片吸引の陋習に因るものだと指摘する。柳書琴氏はまた「製糖會社の正午の汽笛がきこえてきた」といった描写は、范一家の窮境により一層拍車を掛けるのは紛れもなく植民地支配に因るものだとして、呂嚇若は暗に植民地支配を批判しているのだとしている[11]。そのほかにも、呂嚇若は范慶星を通じ「主観的には中国の伝統的な文人としての自己を守ろうとしたものであり」、また范慶星は「客観的には日本の阿片政策の犠牲者としてとらえることができる」といった野間信幸氏の指摘もある[12]。これらの先行研究は、前近代から伝わってきた阿片吸引[13]の因習が范一家を崩壊させた大きな要因でありながらも、家の崩壊を加速させたのは日本の植民支配であるとする点で共通している。范慶星が指定量以上の阿片を購入するため家財を使い果たした点からすると、范家の没落へ繋がる間接的な原因を、植民地政権の阿片専売政策に求める指摘は間違ってはいないのであろう[14]。しかし、「合家平安」に内包される他の問題も見落してはならない。例えば、長男である有福に関わる養子縁組の問題である。そこで、次に養子である有福の視点から、「合家平安」おける養子縁組の問題を検討してみたい。

(2)

「合家平安」の前に発表された「財子壽」と「風水」の両作品においては、主に長男の視点から前近代社会における台湾の家庭形態、若しくは家族関係の変化が語られる。男子系統主義が重視される台湾では、直系嫡長に当たる「財子壽」の周海文にしろ、或いは「風水」の周長乾にしろ、言うまでもなく父親が亡くなった後に自然に次代の当主となるのである。但し、台湾の旧慣によれば家庭に男子相続者が無い場合は、養子を貰うことで宗祧及び財産

を承継させることが一般化されている[15]。そもそも有福もそういった理由で養子縁組を通じ范家に入り、跡継ぎとして新しい家族の一員に迎えられるのである。范家の跡継ぎとして迎えられた有福は、最初は家督を争う男子がいない状況で唯一の後継者と見なされおり、范家において優遇されていた。しかしながら、義理の母の死により情況が急転し、特に継母の出産で正統な後継者と見なされる弟たちの誕生をきっかけに、長男であるにもかかわらず、有福の范家における地位が一変する。義理の母の死後、ついに有福は外祖母に引き取られることとなる。最初は父親から見捨てられた事実を認識できなかった有福にとって、父が義理の母の実家を訪れた際、ほかの従兄弟の前で完全に父から無視された事件は、彼の人生を大きく変えることとなる。その事件以来、有福は「父親を冷酷な、そして自分を子とも思つてゐな」いと推測しはじめ、父との関係は冷え切ってしまうのである。他者でありながら范家の家族メンバーとして迎えられた彼は、またしても他者となり、范家における支配権を失ってしまうどころか、ついには父親からも見放されることとなる。

こうして父との葛藤の中で成長しつつける彼は、恰も父親に対するエディプスコンプレックスを昇華しきれない男性となったかのように、成人したにもかかわらず父から無理な要求をされる度に「何かしら力強い權力に壓倒されたやうな調子で求められるまゝに金錢を與へ」ることしかできない男性に成長する。その後、父と弟たちが共同で経営するレストランが失敗する羽目になりそうな時に、親を養う責任を放棄し新しい世界へと去ってしまう弟たちと比べ、彼はひたすら自分は「長男と呼ばれる者」の立場であるかもしれないと思い惑うばかりであり、父に象徴される巨大な家父長制の不合理な制度を前にして、何一つ反撃もできず行動もしない男性となってしまう。

こうした父子関係のトラウマに捕らわれつづけること以外にも、有福が簡単に家から抜け出した兄弟たちと運命を分かつことになる決定的な違いは、やはり教育を受けていないことであろう。被支配者階級でありながらも、范一族は祖父の時代から築き上げた財力で地方の権力者となる。地主であるがゆえにその強力な経済力をバックに、范慶星は有福の弟たちに近代的学校教育を受けさせ、それぞれ二人は「庄」の書記と「州」の事務見習いとなり、

権力者である日本人側へ一歩近づくことを実現させたのである。その一方で、本来ならば弟たちと同様に近代的教育を受けることが可能であったはずの有福は、かえってその前近代から引き継いできた絶対的な家父長制度が長男に課す不合理な規範に縛られることによって、近代へ歩むチャンスが奪われてしまう。自由な生き方をし、さらに学歴を盾に南洋での新しい生活を選択する弟たちとは対照的に、長男である彼はエリートコースを登るどころか、下層社会で日々貧困と戦いながら父親と継母を養う責任も背負わざるを得なくなる。現実の窮境から抜け出す当ても見えない中、有福は全ての希望を子供たちに託すようになると同時に、旧態依然とした家父長制社会に女性として生まれた三人の娘たちが、恐らく自分以上に様々な不合理な掟に抑圧されるようになることを、彼は誰よりも理解している。子供たちだけは、自分と同じように家父長制社会の犠牲者にならないようと願う彼は、こうした不合理な社会制度から脱出する唯一の手段として、娘たちに教育機会を与えることを選択する。娘たちは教育を受けることで、将来において経済的に独立することも可能となる。たとえ教育を受けることが彼女たちに家父長制社会の桎梏から抜け出すことを保証しえないとしても、少なくともそれは近代社会へ適応していくための保証となるのである。

さらに、「養子縁組」という設定における養子である有福と養親である父との関係は、日本と台湾の関係にパラフレーズして解釈することも可能であるかもしれない。1940年代においては、戦火を拡大させ、後戻りができず植民地を急速に広げようとする日本は、恰も阿片中毒の范慶星のように植民地における経済支配の図式のもとで、台湾から人力や物質、財源などの資源を無理に出させていた。その一方では、被植民者である台湾は、帝国日本のために、南洋や、アジアなどその他の地域に軍属や農工業製品などを送り込み、受動的に大東亜共栄圏の野望を実現することに協力させられていたのである。

周知の通り、「合家平安」が発表された1943年前後は、ちょうど日本政府が南洋や東南アジアへ積極的に帝国の版図を拡大しようとした時期でもある。しかし、戦況が一段と激しくなった上、長年の戦争が続いていた結果、政府の財政状況は悪化していく一方であった。そうした中、日本政府は阿片を専売とし政府財源の収入の一つとして成功を収めた台湾での阿片政策に目を付

け、長年に渡り台湾で実行してきた阿片政策の成果を南洋や東南アジアに移植しようとしている[16]。こうした植民地政策への批判を含め、呂は范慶星と有福における「養子縁組」問題を介し、自らの私欲のため、養子である台湾だけではなく、さらに南方に目を向け良き父を装い、再度養子縁組を申し込み、阿片の専売制度を売り込もうする阿片中毒者の日本を風刺し、「合家平安」に阿片問題を織り込んだのかもしれない。

３「柘榴」

(1)

「柘榴」は 1943 年 7 月『台湾文学』3 巻 3 号に発表された作品である。小作である主人公の金生は幼い時に両親を亡くし、親代わりに弟の大頭、木火を育てた。地主黄福春の紹介で兄弟三人はそれぞれ他家の養子となる。金生は妻を貰うため招夫に入り、大頭は福春舎の作男に、木火は福春舎の親類の蜻蛉子[17]となる。長男でありながらも、兄弟を世話できず、両親に対して親孝行を尽くしていないと、金生は常に自分を責める。兄弟離ればなれになった末弟の木火は精神に異常を来し、最後に独身のままに養家で亡くなった。結婚しておらず、供養してくれる跡継ぎも居ないため、金生は彼の位牌を養家から持ち帰り自らの次男を木火の養子とさせ、過房子[18]の儀式を行ったところで小説が終わる。

(2)

「柘榴」についてであるが、両親への親孝行とされる墓を巡る問題が提起される「風水」と並び、「孝」をキーワードとして「柘榴」を解読する先行研究は、野間信幸氏のほかに、柳書琴氏のものもある[19]。また、呂自身も彼の『日記』に、度々「柘榴」の内容を「美しきもの」として創作しようとしていると書いており、また、作品のテーマについては「兄弟愛」にするとしている。実際、「柘榴」に登場する金生は、弟がまだ幼い時に両親が亡くなり、地主－黄福春の下で小作をしながら生計を立てつつ、生活に苦労しながらも、父親のみならず母親の役割をも代行し、二人の弟を育て上げる人物として描かれる。厳しい生活情況の中で、彼ら兄弟の生計を何とか成り立たせること

ができたのは、地主の黄福春の助けに因るものである。そして、黄福春は、ただの「金満家であり讀書人で」あるだけの人物には設定されていない。金生兄弟にとって、黄福春は「日頃生活の指導と厄介をかけ」、必要な時に彼ら兄弟に様々な助言をしたり、手助けしたりしてくれる「常に心の寄所」である重要な人である。黄福春について柳書琴氏は、地主でありながらも「孝を大切にし、素朴に勤勉で且つ人助けに熱心」な人としている。さらに、「柘榴」とこれ以前の作品と比べて分析し、「柘榴」においては、作品のスタイルや題材の扱い、作品に込められた理念などは基本的にはこれまでの作品とそれ程の差が見られないが、呂はこの作品にはより多く人間性の素晴らしさ、伝統の良さに着目して描いた、と論じている[20]。確かに柳氏の指摘の通り、兄弟のために長男の金生が一家の再建に向け懸命に努力する点から、「柘榴」が兄弟愛を語る小説として読まれるのも無理はない。しかし、実際に作品の内容を検証してみると、例えば、黄福春が作品に登場するシーンの独特な描き方や、彼と金生との会話に隠される不公平な視線などの点から考えれば、好人物のように描かれている黄福春のキャラクターに全く問題がないわけではなく、「柘榴」に内包される家の問題もそれ程簡単なものだとは考えられない。そこで以下、作品に登場する黄福春に関するシーンを抜粋して検討してみたい。

> 黄福春は、丁度庭先に出て涼んでゐた。暗い庭に部屋の門口から洩れて出た一條の白い光線の中に彼等はゐた（中略）その吠聲で先刻別れたばかりの大頭も白い光線の中にその姿を現はした。桂花の香がにほひ、暗い中にも整然とした庭のつくりの齎すひきしまつた雰圍氣が感じられ、金生は金満家の屋敷に踏み込んだ緊張味に全身が冷水を浴びたやうにしんとなつた（中略）福春舎は何でもないといふ口調でいひ、白い光線の中に白い莨の煙を吐き出し、後は呼吸の音さへも聴えない程の静けさの中に煙管を吸ふ音だけをたてゝゐた。（下線は筆者）

以上が失踪した木火を夜中まで探しても見付けられない金生が、弟の安否を心配しながら途方に暮れてしまい、黄福春の家を訪ねるシーンである。闇

の中で弟探しで疲れながら、金満家の屋敷に踏み込んだ時に「緊張」、「全身が冷水を浴びたやう」などの表現で描かれる金生の狼狽した姿と冷静な黄福春との描写は対照的である。ここでは、とりわけ黄福春が作品中に登場する時に伴う「白」さの描写に注目したい。金生の狼狽する姿とは違い、黄福春に纏わる「白い光線」、「白い莨の煙」の表現は、貫禄がある人をイメージさせるほか、「白」さは容易に権威を連想させ、恰も権力のシンボルであるかのようにも思われる[21]。それだけではなく、黄福春の権威のイメージとして使われる「白」さが、お互いに会話を交わす時に黄福春から金生を見下ろすような視線の差まで感じさせてしまう効果が醸し出されているだけでなく、二人の上下関係もより鮮明に、そしてお互いの距離感もより一層隔たっていく感覚にも繋がる。「白」さが持つ特殊な意味の他に、黄福春の金生に対する蔑視にも近い表現も実際に会話の中にある。例えば、次のような箇所である。

> 「さうだらう。さうだらう。」と福春舎は鼻で笑つた。「大頭からきいたがね。この夜中ぢや、見付かる筈ないぢやないか。さう簡單に見付かつたら、或はもう氣狂がなほつてしまつてゐるのかも知れないなア。」（中略）「心配したつて同じこと。氣狂といふ病氣は長く構へる病氣ぢや。」福春舎は何でもないといふ口調でいひ（中略）「しかし、この夜中に何處かをうろついて、或はもしか……」「論語に商聞之矣。死生有命。富貴在天。といふのがある。是れ吉凶禍福死生壽夭の運命が、盡く天の司る所のものであることを謂ふのぢや。（下線は筆者）

幼い頃から三人で互いに頼り合ってどうにか生きてきた弟が見付からず、動顛して訪ねてきた金生に対し、落ち着かせるためとは言え、木火が失踪したことを無関心に突き放すかのようにも感じ取られる黄福春の態度が印象的である。後に金生の話を遮るため、当然教育を受けているはずのない金生に向け、いきなり論語を引用し、どうにかその話題を切り上げようとする感じも受ける。その一方で、金生が黄福春の話を聞いた後の反応にも注目したい。福春の話を聞いてから、金生は「欝積してゐた胸の蟠りが水の引くやうに解けて、心のどこかに明るみが射したやうに感」じ、やはり黄福春は「偉い人」

だと感心する反応はどうしても違和感を覚える[22]。要するに、ここで金生が木火の失踪を仕方のないこととして納得したのは、黄福春の慰めの言葉によるのではなく、むしろ言葉の背後の黄福春が受けた知識（教育）の威光に屈服したのであろう。以上のような視点から検討してみれば、黄福春という人物は柳書琴氏が指摘した「孝を大切にし、素朴に勤勉で且つ人助けに熱心」な人としては簡単に片づけられないのであろう。

先述した通りに、金生が黄福春をそれだけ大切な人物だと思うのは、何よりも「日頃生活の指導と厄介をかけてゐ」るからである。この点から考えれば、黄福春は知識人にありがちな優越感を別にし、やはり好人物であるかのようにも思える。しかし、「日頃生活の指導と厄介をかけてゐ」ることから、本来金生にあるべき権利が黄福春に奪われていることをも意味している。最初は、両親を亡くした金生は生活が苦しくても「他力本願ではなしに自力で」生活していくと決心していたが、地主である黄福春に懇々と諭された結果、生家を捨て兄弟三人がそれぞれ違う形で養子となった。本来ならば、家長であり戸主である金生は、兄弟たちの居所や婚姻まで指定できるはずだが、養子となった以上、戸主としての権利と義務も黄福春に委ねざるをえなくなる。こうした意味では、金生兄弟がバラバラになり家が崩壊した責任の一部は黄福春にあると言っても過言ではない。確かに、招夫となった金生は八年の契約期間満了を待てば、また養家から分戸することが可能であり、家長としての名誉を回復することもできるかもしれない。しかし、自ら家庭を作ることができたとしても、それは単に形式上の残骸が維持されただけで、内実は何一つ機能しない家になるのであろう。なぜなら、仮に物理的に改めて家を築き上げたとしても、精神的には黄福春を前に金生は永遠に彼が言うままの「扮装した家長」を演じざるをえないからである。そして、もう一つ注意しなければならないのは、金生が両親への不孝の罪悪感を深く背負うのは家嗣を守れないことに対してであるが、家をバラバラにする根本的な原因を追究すれば、それはまさに金生自身によるものであり、何よりも彼が自らの「家庭」を築き上げるために弟たちを犠牲にしたからだとも言える。黄福春から「招夫」の話しを持ちかけられた当初は、彼も少し迷いを見せたが、最後にはやはり「自分が妻一人ほしさ」のため、長男という優位な立場を利用し、大頭

が黄福春の作男に、木火が黄の同族の螟蛉子にという条件で自らの婚姻を成就することを優先させた[23]。特に木火を完全に他人の家の養子にまでさせたのも、黄福春に「三人兄弟の中の一人位は」と諭された上、「黄福春の恩義にこたへた」ことによるものである。こうして、長男である金生の視点と地主階級の黄福春とのキャラクターを含め「柘榴」を再読すると、呂が描きたかった「美しきもの」とは裏腹に、その作品内容は兄弟愛を描き出そうとする小説とは思えない点も多く残されている。

終わりに

以上、作品の発表順に沿って、「家」及び「家族」という共通するモチーフの下で、男性主人公の関係性に注目しながら分析を行ってきた。結果として、いずれの作品においても共通しているのは、父対子（兄対弟）といった男性を中心とする関係性において、男性主人公たちの葛藤及び権力闘争が描かれていることである。そのほか、「養子」というキーワードを通じて、家の外部、即ち植民地社会における縦の関係性で分析すると、「合家平安」と「柘榴」は、国家・社会と個人の関係（地主対小作、日本対台湾）にパラフレーズして解釈することが可能になると考えられる。

これら四作品はいずれも台湾の伝統的家庭を舞台に、家における様々な家族関係が描かれているものの、主に男性主人公を中心とした作品であり、男性の中でもとりわけ長男のキャラクターが注目される。その理由としては、恐らく前近代の台湾家庭において、家の存続を背負うのは長男であることが考えられる。植民地支配が開始されると、必然的に様々な近代社会制度が前近代の台湾社会に導入される。戸籍制度や新式教育、新しい経済政策などといった近代社会制度の導入により、従来の家の形態と家族関係は変化を余儀なくされる。そうした中、長男たちは家を如何なる形で存続させるかという難題に直面することとなる。植民地支配者である日本を象徴するような新しい父権に対抗するのであれば、長男は家を近代から守らなければならないのである。その一方で、一家存続の重荷を背負ってきた長男にとって、家からの自立が彼らの永遠の課題であるかもしれない。しかし、家父長制の傘下で優遇されてきた彼らは新しい近代社会に直面する際、自らの長男としての権

威を守るため、ひたすら消極的、非理性的な言動しかしない。なぜなら、近代社会制度を前近代の台湾社会に持って入った新しい父権に抵抗しようとするならば、彼らは去勢される恐怖に脅かされるに違いないからである。そうしたジレンマに陥る長男像が「財子寿」と「風水」に登場する。「財子寿」の周海文は「家」の支配権を握っていても、近代化を受け入れ闊歩していく弟達とは違い、「近代」を窺うばかりで決して家から出発しようとしない。また近代化に対する受け入れ方の違いにより、家庭における権力が新しく序列化され、長男の立場が危うくなるのは「風水」である。長男である周長乾が恐れているのは、力関係の変化により昔から付与されてきた権威が脅かされることと同時に、彼自身が淘汰されていくことでもある。自らの惨めな姿を隠すため、彼は礼節が重んじられていた祖父の栄光時代に縋り付き、なお責任の所在を「近代」に転嫁し、自ら長男であるべき責任から逃れようとするのである。

さらに、「合家平安」に描かれるのは、台湾の伝統的な慣習－養子縁組により、当主の座を一旦取ったものの、「家」においての実際の支配権が無く、近代における法的な制度にも保護されないため、かえって家父長制の犠牲者となった長男像である。最後に「柘榴」における金生は、男性を中心とする社会支配形態においては、地主である黄福春に支配される側に属するが、家父長制の下では、一家の長として家の支配権を有する側になる。長男である以上、一家の存続を託される存在ではあるが、彼は逆に優位な立場を利用し弟たちを犠牲にするような長男へと変貌する。長男であるにも拘わらず、それぞれの養子縁組の理由で家における実権を失う有福と金生には、去勢される男としてのコンプレックスが顕在化し始める。なぜなら、彼らは支配者側の権威に圧倒され、支配者が持つ権力と富を肯定的に捉えている傾向が現れているからである。舅父に愛情を感じた有福、或いは黄福春を偉人だと思う金生には、彼らが憧れて信頼を寄せるのは、舅父と黄福春ではなく、むしろ彼らの権威である。言い換えれば、台湾の前近代の家父長制度下にせよ、植民地支配下にせよ、支配側の威光に屈する一方で、彼らが望むのは、いずれにしても自らが本来的に有していた権利の回復であろう。

ところで、養子を巡る家の問題を描いた作品からは、これらの前作として、

呂が渡日する前に発表した「逃げ去る男」が想起される。「逃げ去る男」の主人公慶雲は、「財子寿」の周海文、「風水」の周長乾と同様に、家父長制の傘下で優遇される男性の一人として一家に君臨する嫡男である。妻には理解されず、また父親にも愛されない息子として、「家庭の復興」を図ろうとし、祖父の代に築いてきた名誉と財産を守ろうとする慶雲の姿を考えると、そこにあるのは一心に家の伝統を守ろうとする一人の哀れな男と考えられるかもしれない。しかし、注意深く読めば、大義名分を唱える彼の本心から危惧しているのは、やはり周海文や周長乾と同じように、連れ子である弟に権威を奪われ長男の座から追い落とされることであろう。よって、彼が幾たびも懸命に父親に訴えたのは、自らの家における嫡男としての正統性、及び血の繋がりも無い弟の金星を「戸籍」[24]から追い出すことである。なぜなら、法的な手続きで結ばれ親子関係となってしまった以上、金星が正式に法的な規範の下で保護されることとなり、家父長制における家長としての権利を再び獲得する願望が実るどころか、彼の家における地位がより一層危うくなるからである。辛うじて家における権威を維持しながらも、決して家から出発しようとしない周海文や周長乾とは違い、長男である前に、家における支配権が徐々に弟に奪われつつあり、「唯一の味方」[25]である妻までに裏切られた現実を直視できない慶雲は、家から逃走することを選んだ。

以上、家における長男像を分析してきたが、長男たちとは逆に近代社会制度を積極的に受け入れ、時代の風を追う次男像の作品における意味についてももう一度把握しておきたい。前近代の家父長制の権力だけに頼り、家族に君臨してきた長男は、過去の栄光に縋りながら、近代を指向する次男を責めることにより、自らの不甲斐なさを正当化し必死に家における地位を保とうとする。その一方で、社会から周縁化されてきた次男たちは、新時代がもたらした教育、経済機会を利用し、今までとは異なる形で家に「近代」を取り入れようとしている。「家」における古き伝統を守るのか、あるいは新時代に淘汰されないように新しい近代性を「家」に入れるのか。「家」を共有する兄弟たちの一人は「近代」を家に積極的に取り入れようとするのに対し、常にもう一人は家の「伝統」を維持しようとするといった設定は決して偶然ではない。なぜなら、こういった兄弟たちの闘いの裏には呂赫若のアイデンテ

ィティの葛藤が反映されているからである。

つまり、呂にとって、植民地支配が実践されることにより、近代は彼の近代的な音楽の素質、文学的な感受性を鍛えてくれたわけである。その一方で、「近代的な自我」を確立するために、彼は前近代における「家」から自立をしなければならなかったのである。しかし、近代教育を受ける知識人である一方、地主階級の家庭に生まれた呂にとって、如何にそれを作品中に描き込むかが、彼にとって永遠のテーマであったかもしれない。日本のプロレタリア文学雑誌『文学評論』に処女作である「牛車」を発表することによって、呂赫若は台湾のプロレタリア文学を代表する新人作家として脚光を浴び、「牛車」をはじめ社会における不条理な階級制度に注目し暫く創作を続けていたが、時の流れに連れプロレタリア文学への道を徹底せずに、専ら台湾の伝統家庭を描くような作家となった。また、積極的に近代を抱擁する次男（女性）を作り上げる一方、主人公である男性像の多くは、容易く男性を中心とする価値体系及び固定観念に束縛され、大きな革新に直面する際、自らを優位とする権威を守るため、ひたすら消極的な言動を取る男ばかりである。「牛車」の新しい父権に直面する楊添丁をはじめ、女性解放に理解を示す「婚約奇談」の春木、或いは家の在り方を問われる周海文・長乾たちは、決断を迫られると必死に現状を固守し、いったん責任を負えなくなると、現実を直視できないまま「逃走」する形へと変化していく。要するに、そうした不甲斐ない男性像と対峙するもう一人の男性（女性）が常に作品中に存在しているのは、呂がこうした自己撞着的な心情を表出しているからと言えよう。

さらに、呂がメトニミー（換喩）として強い表現力を持つ「家」の崩壊と再建というテーマを繰り返し創作することにも注目しておきたい。要するに、長男をはじめ、家・家族・養子といった伝統家庭を巡る大家族の人間劇を彼が執拗に描く裏には、「家庭」における人間関係に対する呂赫若の不安の表出が読み取れる。それを大文字の日本に置き換えれば、まるで作家自身が帝国という他者との安定した関係を切に求めているかのようにも思われる。こうした呂赫若自身のアイデンティティの問題とより関連していると考えられるのは、作品中における養子縁組の設定ではなかろうか。「合家平安」、「柘榴」における疑似親子関係の如く、恰も日本へ養子入りしたかのような呂赫若に

とっては、いくら能動的に近代から付与された権利を行使しているかのように見えても、宗主国である日本の前では、彼は永遠に扮装した家長でいなければならないのである。すなわち、呂がくり返し「養子縁組」を描くことにより切に待望していたものは、養子である有福と金星のように、帝国からの「父権」の奪還だったのではないだろうか。

註

[1]「『洗骨』（拾骨）とは、埋葬した後一定の期間を経て其の骨を墓より掘り出し拭いて日に乾かし、その後『金斗（キムダウ）』と称する長き瓶に入れて置くことである。」（鈴木清一郎『臺灣舊慣冠婚葬祭と年中行事』、株式會社臺湾日日新報社、1934 年 12 月、p.265）

[2] 例えば、林明徳「呂赫若的短篇小説藝術」（『呂赫若作品研究－台灣第一才子』行政院文化建設委員会・聯合文学出版社、1997 年）は、この二作について以下のように評している。

「這篇是在敘述福壽堂周家內部傾軋、沒落的歷史，向來被視爲封建家庭的社會小說。」（p.32）「作者的興趣似乎想藉風水的迷信，探討傳統農業社會道德的危機與解體。因爲風水呈現的是傳統孝道與個人利益衝突，以及維護過程所付出的悲哀沈痛。」（p.34）

[3] 「臺灣人は男子尊重で男子系統主義である、即ち祖先の祭祀を以て人道の大義とし、直系嫡長の男子之に當るので、若し男子ないときは養子を認めるも同宗の者か又は同姓の者に限るので、若しこれが無かつた場合は祖先の祭祀を絶つことになるとて、之を怖れて居る。これ宗祧承繼の観念で自己の宗統を子孫に傳へ之が繁榮を圖り永く斷絶させないのが父祖に對する最大責務であるとするのである。それで成るべく多數の子而かも男子を産むことを喜ぶのである。後に至り宗統を斷てば祭祀を絶つことになるので、實子がなければ同姓の養子即ち過房子を認むるのみならず、異宗異姓の養子即ち蜻蛉子をも認むることゝなり、子孫が共同して祖先の祭祀を為すやうになつた。」（鈴木清一郎『臺灣舊慣冠婚葬祭と年中行事』、p.93）

[4] 鈴木清一郎『臺灣舊慣冠婚葬祭と年中行事』、p.132。

[5] 曽景來『臺灣宗教と迷信陋習』、臺灣宗教研究會、1938 年、p.232。　または鈴木清一郎『臺灣舊慣冠婚葬祭と年中行事』、pp.131-133。

[6] 「明治三十九年一月十五日ヨリ明治三十八年十二月二十六日發布臺灣總督府令第九十三號『戸口規則』カ施行セラレテカラ急速度ヲ以テ民法ノ親族、

相續ニ關スル法則又ハ戸籍法ニ接近シ來り、家ノ内外ニ對スル家長又ハ尊長ノ地位ハ戸主制度ニ改マリ又家産承繼ノ制度ハ破レテ共同相續制度トナリ家産ナル名稱ハ共有ノ別名ノ如ク使用セラルル等著シイ變革ヲ生シテヰル。」（姉齒松平『本島人ノミニ關スル親族法竝相續法ノ大要』、臺灣總督府官房法務課内臺法月報發行所、1938 年 5 月、p.43）

7 査媒嫺とは、家長に絶対に隷属し、社會的には人格の存在を認められなかったもので、昔から台湾の社会に存在している一種の奴隷制度であり、家長は査媒嫺に対し、懲戒することから、婚嫁することまで、絶對的權能を有する。素珠はこうした昔からの査媒嫺制度における査媒嫺に相当する。大正 6 年「公の秩序善良の風俗に反する」との判決があったため、以来警察において査媒嫺入戸の戸口上の届出は之を受理しないようになった。（鈴木清一郎『臺灣舊慣冠婚葬祭と年中行事』pp.142-144、及び曽景來『臺灣宗教と迷信陋習』p.46、p.165）

8 戸主の権利義務については、『本島人ノミニ關スル親族法竝相續法ノ大要』（前掲註 6、pp.75-86）に詳しく記されている。戸主の主な権利と義務については、居所指定権や同意権（家族の婚姻、養子縁組、家族の離籍、復籍）、家族を扶養する義務などが挙げられる。その一方、家族の主な権利と義務は、姓を称する権利や、財産を特有する権利、扶養を受ける権利、戸主権に服する義務などが挙げられる。

9 例えば、柳書琴氏はこのことについて、次のように述べている。

「比較今昔,自祖父時代或更早以來留下的這個家仍在,但是此刻處於『製糖公司的煙囪』為新秩序中心的它,已經完全變了樣」。（中略）「呂赫若似乎藉此暗示對舊秩序的追念以及對新時代道德脱序的諷刺」。（柳書琴「再剥〈石榴〉」、『呂赫若作品研究－台湾第一才子』、行政院文化建設委員会・聯合文学出版社、1997 年、pp.151-152）

10 「吸鴉片煙的惡習，呂氏在〈逃跑的男人〉及〈合家平安〉中寫盡了吸鴉片煙者的墮落與遺害後代的境況。尤其後者的最末一段還點明了這個主題。」（林瑞明「呂赫若的『台湾家族史』與寫實風格」、『呂赫若作品研究－台湾第一才子』、聯合文学出版社、1997 年、p.67）

11 柳書琴「再剥〈石榴〉」（前掲註 9）、 p.151。

12 野間信幸「呂赫若－孝を描いた台湾人作家」、『中国哲学文学科紀要』創刊号、1993 年 3 月。

13 阿片問題についてであるが、阿片吸引の習慣は日本植民地支配が始まる前から長らく台湾に存在する陋習であり、日本は台湾を統治しはじめてから阿片吸引の習慣を根絶させるため、漸禁の専売政策を実施するようになった。

むろん阿片を専売制にした背景に、台湾の統治を円滑に行い、植民地政府の財源収入を増やすといった総督府の思惑が存在していたことは疑うべくもないが、こうした専売政策により台湾における阿片吸引者が激減した事実も無視できない。(『続・現代史資料 12 阿片問題』、みすず書房、1986 年、pp.35-38) または許介鱗「後藤新平とその阿片謀略」、『植民地文化研究』第 4 号、2005 年 7 月)

14 この点について垂水氏は、「合家平安」が発表された時期に注目し、「『合家平安』の執筆された 1943 年は台湾阿片問題のほぼ終息期に当た」り、それは呂が「旧支配階級者である慶星が如何に没落していったかを記録していく上で、無視できない要素として結果的に阿片問題が浮上してき」たといった別の観点から阿片問題を論じている。(垂水千恵『呂赫若研究－1943 年までの分析を中心として－』、風間書房、2002 年、pp.251-252)

15 鈴木清一郎『臺灣舊慣冠婚葬祭と年中行事』(前掲註 1)、pp.132-137、または曽景來『臺灣宗教と迷信陋習』(前掲註 6)、pp.164-167。

16 『続・現代史資料 12 阿片問題』、pp.193-207、pp.362-366。

17 「姓ノ異同ヲ問ハス實家ト絶縁シタル買斷ノ養男子即チ實家ニ於ケル從前ノ親族關係ヲ絶チテ養家ニ入ルモノ。」(前掲註 6 pp.164-165、または前掲註 3)

18 「姓ノ異同ヲ問ハス實家ト絶縁セサル買斷ニ非サル養男即チ實家ト從前ノ親族關係ヲ其ノ儘持續シテ養子トナルコトヲ意味スルノテアル。」(前掲註 6 pp.164-165、または前掲註 3)

19 「因此,透過家庭成員從夭折到新生、從離散到復合的經過,同時也透過對「孝悌」描寫,〈石榴〉生動地展現了一個鄉村農夫真切而深切的生活感覺與生命秩序。」(前掲註 9 p.149)

20 前掲註 9、p.162。

21 「柘榴」に限らず、「風水」や「合家平安」などでも権力のシンボルに関する描写箇所は「白」さを伴って描かれている。例えば、「風水」においては、無理に母親の洗骨を早めた弟の行為を親不孝だと嘆く周老乾が、自らの家の白い壁を眺めているうちに、かつて幼少時代に祖父を中心に、礼節を重んじる家族全員と一緒に洗骨の儀式に臨んだ光景が徐々に脳裏に浮かんできたという描写が以下の箇所である。

> 脚下には田野が煙つて見える。眼で探すと製糖會社の煙突を目標にその近くにある自分の家が籔陰に白い壁を見せてゐる。周老乾老人の老眼ではぢつとそれを長時間に遠望する視力はなかつたが、白く霞んできた視野の中

に、八の字に髭をのばして辮髪をした祖父の命ずるがまゝに多数の家族が禮節を重んじ祖先を尊んだ昔の幸福だつた家庭生活が髣髴として浮かんでくる。（中略）風水を發いてゐる時などは墓庭に膝まづいて尊祖の禮をした。

この一連の描写から考えると、「白い壁」は単なる物理的な「家」として取り上げられるに止まらない。「白い壁」とは、長幼の序がある家父長制の家庭において、礼節が大切に守られる家族集団の意味合いとして敷衍され使われているのである。即ち、この箇所で使われる「白」は実に家父長制における権力のシンボルとして、象徴的に取り上げられていることが明らかであろう。さらに、「合家平安」には、「何時の間にか後の暗がりに煙管を口にくはへて白い煙を吐き出してゐる、三番目の舅父の姿があらはれてゐた」との描写がある。これは、常に養父范慶星に言われるままに無理な要求をされてきた有福が、弟達が南洋へ行くことをきっかけとして養父に無理に同居を求められた際、父親代わりにいつも助けてくれた舅父がいきなり現れた場面である。些か不自然な登場ではあるが、「柘榴」の黄福春が登場する際に纏わる「白い光線」、「白い莨の煙」との表現と同じく、舅父はむろん家父長制の尊長として、権力の表れを象徴する意味合いで登場したと思われる。いずれにせよ、「柘榴」や「風水」、「合家平安」三作品においての「白」は、男性を中心とする家父長制における権力のシンボルとして使われている傾向が見られる。

22 ここの箇所だけではなく、金生が黄福春と会うシーンの描写においても、基本的にこうした上下関係を感じさせる構造が成立している。例えば、次のような箇所もそうである。「不思議と福春舎の前に出るとその威厳におされて、金生は言ひたいことの半分しか言へないのだつた。」

23 「はじめ福春舎からその話を持ち込まれたときは、弟達と別れるに忍びないので反對したが、重ねて弟達はもう獨立出来る年齢だし、貧乏生活では他家の招夫ともならなければ妻帯出来ない自分の境遇を懇々とさとされると、金生もその氣になり、では自分よりも、後残される弟達の身の振り方さへつけばいゝと約束したところ、二三日を經ずして、木火は福春舎の同族の螟蛉子として貰ふこと、大頭は作男として自分の家に引き取ること、この条件で福春舎から回答があつた。只木火が他家の子供として貰われることだけが氣にかゝつたが、貧乏といつても二分位の土地が残つてゐるし、それに三人兄弟の中の一人位はとさとされると、どうせ貧乏生活で苦しんできた自分達だと心を縦にして承諾した。」（『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第二巻［呂赫若］』、緑蔭書房、1999 年、pp.251-252）

24 「若しや父は、連子を入籍さしてゐるのではなからうかと、遂に僕は疑ひ始め」(『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第二巻［呂赫若］』、緑蔭書房、1999年、p.112)「僕は息子を必要ともしないのに他人の子を息子として籍を入れ、本當の息子と財産分配させるなんて馬鹿だと、怒鳴りつけようとしたのでした。」(中略)「金星の籍を出してください。或いは私を子供とも思つてゐないのですか。」(同、p.116)

25 始終妻を「唯一の味方」と称するのは、単に慶雲の一方的な言動だけである。味方と称しながらも、彼は妻を田舎娘と見下し、自らの感情をコントロールできなくなると、妊娠七ヶ月の妻に暴力をも振るうような行動をする男である。また母親の死についても、母の死を悲しむと言うより、自らの出世を見届けずに死なれたことにより、継母と連れ子を迎えざるを得ない局面に陥り、長男でありながらも家における権威が危うい立場になることを嘆くだけである。これらの身勝手な言動からすると、彼は恰も虎の威を借る狐のように家父長制の権威を利用し、女性を従属物と見なす利己的な男性に過ぎないのである。

(jieminlo@gmail.com)